

銀の皿

「心の満たし」



私の 10 代後半は虚しさとの戦いでした。以前コンプレックスが強く他人と比較しがちであったことを書かせていただきましたが、そんな劣等感を埋めるために色々な事をしました。楽器を初めてバンドを組んでみたり、趣味を探してみたり、その時の流行に乗かってファッションに気を使ってみたりと、色々やってみても何か満足感がなく。どれもこれも長続きしませんでした。そんな自分を見つめる時、「物事の上辺ばかり追い求めている、中身のない人間だ」といつも自分を責めていました。いつも下を向いて、はっきりしゃべるのが苦手でした。自分に自信が無かったからです。

そんな自分の心を満たすものに出会いました。それが夜遊びする事です。当時高校生で経済力もありませんから、出来る事といえば、何人かの友人とコンビニエンスストアの前でしゃべったり、お金がなければ公園で夜通し、しゃべったりお金が多少あれば、ファミリーレストランで又夜通ししゃべったりしていました。その時間最高に楽しく、嫌な事もすべて忘れる事ができました。しかし朝帰って布団に入る時、強烈な虚しさがいつも襲い掛かってきました。あの虚しさは何か布団の中から見ている天井の景色が白黒に見える続けているような感覚でした。そんな生活から抜け出したいと願いながら、ずるずる夜遊びを続けていました。

でもそんな信仰生活のバックスライドから抜け出すことが出来たのは、満たされるという体験をしたからです。熱心な教会学校の先生の祈り、教会の友人の祈り、牧師先生の祈りを通じて、イエス様に出会う事ができました。それが教会のキャンプの時でした。

その時「ああ、日曜学校の先生が言っていた、『銀ちゃんは愛されている』という事はこういう事なんだ」と思いました。今まで聞き続けた日曜学校の言葉がすべて浮き上がって輝くようなそんな体験でした。そして私は夜遊びを止めて、教会に行き続けるようになったのです。本当に私の心を満たす方に出会ったからです。

今日の箇所で、父がいなくなったと思っていた息子に出会った時、その喜びは内臓が震えるほどの喜びでした。表しきれない喜びが全身に震え、そして息子に駆け寄り抱きしめました。息子が償いの言葉を言い終わる前から、父は最上の着物を用意し、肥えた子牛を息子に用意しました。この行動からも「使用人の一人？ 罪びと？ とんでもない、お前は私の最愛の息子だ。わかったか！」というメッセージが聞こえてきます。父はただ息子が帰ってきたことを喜んだのです。私達は無償の愛によって神の子とされました。それが私達の心の満たしの源泉です。その喜びが奉仕の源泉です。その喜びが他者を慈しむ源泉です。私達はいつも何かをしたいという思いと私には何も出来ないという間で苦しみます。私達は紆余曲折ありますが、自分に対しても他者に対してもあきらめてはいけません。つまり「もう付き合いきれない」というボタンを押してしまう事です。私達は愛されています。うつむきやすい私達ですが、共に主を見上げて前進してまいりましょう。

